



TITLE:

西夏の二つの官僚集團--十二世紀後半における官僚登用法

AUTHOR(S):

佐藤, 貴保

CITATION:

佐藤, 貴保. 西夏の二つの官僚集團--十二世紀後半における官僚登用法.
東洋史研究 2007, 66(3): 400-432

ISSUE DATE:

2007-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/138227>

RIGHT:

西夏の二つの官僚集團

——十二世紀後半における官僚登用法——

佐藤 貴保

はじめに

- 一 『金史』交聘表に見る朝貢使節の人選
使節派遣の目的
 - 二 正使・副使の官稱號
 - 三 服裝の異なる二つの官僚集團
 - 四 再任のされ方
 - 二 『天盛禁令』編纂者リストに現れる官僚集團
 - 一 官稱號の帯び方の特徴
 - 二 「學士」「博士」の集團
 - 三 「殿前司」「内宿司」の集團
 - 四 武官系官僚の採用法
- おわりに

はじめに

十二世紀前半から十三世紀初頭にかけて、中國寧夏地方及び甘肅西部の河西地方を支配した西夏國は、皇帝を輩出した

タングート人を筆頭として、西夏の擡頭以前からの住民である漢人やチベット人、ウイグル人、沙陀人などによって構成された多民族國家である。

西夏と同時代の中國東北方では、半農半遊牧民である契丹人が遼朝を、ついで半農半狩獵民である女真人が金朝を興し、漢人農耕民の多く居住する中國本土の一部を征服した。遼・金兩王朝は、遊牧・狩獵民を従前の部族制で、中國本土は征服以前の中國在來の制度で統治するという、いわゆる「二重統治體制」を施行するとともに、被征服民である漢人からも官僚を登用し、契丹文字や女真文字を創製する一方、中國本土では在來の漢字も公に使用されていた。このような遼・金朝の統治體制は後に、中國本土全域とそれ以外の地域を同時に支配するモンゴル帝國（元朝）や清朝にも受け繼がれ、これらの王朝は「征服王朝」と總稱されることもある。

西夏もまた、遊牧民主體のタングート人が漢人を中心とする寧夏・河西地方の現地農耕民を支配し、西夏文字を創製する一方で漢字も公用していた状況は遼・金朝と類似している。⁽¹⁾では西夏も遼・金朝と同様の支配體制をしていたのか。現時点では、史料的な制約から農耕民と遊牧民を別々の制度で統治した事實は確認できていないが、十世紀末～十一世紀前半の建國期において、タングート人だけでなく、多くの漢人が政權の中樞に参入していたことは先行研究によつてすでに明らかにされている。⁽²⁾一方で、國家體制が確立した十一世紀後半以降については、官司・官職の名が知られている程度であり、⁽³⁾どのような仕組みで人材を登用したのかは未解明である。人材登用法を含む官制研究の解明は、西夏が遼・金朝のような征服王朝に類似した政治體制を持つのか、あるいは中國王朝の官制を採用しているのか、中央ユーラシア型遊牧國家の部族制を維持しているのかを知るうえで重要な作業である。

これまで官制研究が進まなかった最大の理由は、遼・金とは異なり、西夏のいわゆる正史が編纂されなかったことにより、職官志のようなまとまった情報が存在せず、また特定の人物の経歴を記録した傳記史料や墓誌などの史料も皆無に等しいことに求められよう。しかしながら、正史や傳記史料以外の史料は少ないながらも存在する。カラホト遺跡（内モン

ゴル自治区エチナ旗）から出土した西夏時代の文獻や隣國の金・宋の文獻を読み直すことによって、ある特定の時期の政權がどのような集團によって構成されていたのかにアプローチすることは可能である。本稿では、約二百年続いた西夏國の全盛期にあたり、⁽⁴⁾かつ特に西夏側と金・宋側雙方の史料が比較的豊富な十二世紀後半においてどのような官僚集團が形成されていたのか、彼らがどのようにして官僚に登用されていたのかを検討していく。

一 『金史』交聘表に見る朝貢使節の人選

一 使節派遣の目的

『金史』卷八三―卷八五・交聘表は、西夏が金朝へ派遣したすべての使節（以下、遣金使節と略す）の派遣年月とその目的を記載している。西夏は天會二（一一二四）年に金朝に初めて臣禮をとった。以後、モンゴル帝國軍と呼應して金朝領に侵入する直前の泰和八（一二〇八）年まで、ほぼ毎年朝貢使節を派遣していた。朝貢使節の派遣は正大二（一二三三）年に再開されたが、その二年後、西夏はモンゴル軍の攻撃を受けて滅亡する。西夏は金朝皇帝の誕生日祝いの使節（賀生日使）と年賀の使節（賀正旦使）のほか、臨時に西夏の皇帝・皇太后の死去を知らせる使節（告哀使）、金朝から三年に一度贈られる横賜に對する使節（謝恩横賜使）、金朝皇帝の死去に際して送られる使節（奉奠使）などを派遣している。

『金史』禮志には、正大二年の和議成立後に金朝が西夏の朝貢使節の儀禮について定めた「新定夏使儀注」が記録されている。そこには次のようにある。

凡そ衣を賜うに、使・副に各三對、人從に衣各二對、使・副に幣帛百四十段、舊は又た貂裘二を賜い、無ければ則ち使は代うるに銀三錠を以てし、副は代うるに帛六十疋を以てするも、後に之を削る。（中略）朝辭するに、人從に銀二百三十五兩・絹二百三十五疋を賜う。⁽⁵⁾

とあり、正使・副使やほかの從者に對し絹織物や銀などが與えられることになっていた。上の文中では「舊は又た貂裘二を」賜與していたものを「後に之を削」ったとある。「新定夏使儀注」が制定された當時、金朝はすでに一二一三年のモンゴル軍の侵入によって中都（現在の北京）やマンチュリアを失い、マンチュリア特産の貂皮の入手は困難であつたはずである。つまり「舊」とは、西夏との國交が斷絶する一二〇九年以前の内容を指しているものであり、上の記述の大部分は、十二世紀後半においても適用できるとみなしてよからう。

西夏の使節にはこのほかにも入朝時に特典が與えられた。「新定夏使儀注」には、西夏の使節が都（制定當時の都は開封）に到着すると、二日間交易活動を行うことが許されていたとある。⁽⁶⁾このような交易活動は、「新定夏使儀注」制定以前にも斷續的に行われていたことが『金史』で確認されている。⁽⁷⁾

交易活動の利益は、使節の送り主である皇帝や皇族だけが享受したわけではなかった。天盛年間（一二四九―一二六九年）に西夏で編纂された法令集『天盛改舊新定禁令』（以下、天盛禁令と略す）卷十八「他國との賣買門」・第一三一九條「朝廷の駄畜の上に私財を載せる」には、次のような規定がある。

一、他國へ使する者が行く時、正・副使、内侍、閤門、朝廷の商人、ラクダ商人、馬に付き従う者に屬する私財、及び諸々の人が私財で賣買するところのもの等を、朝廷の駄畜の上に載せることを許すことはない。もし法を踰えた時、財を載せた者は六ヶ月（の徒刑）。その中で朝廷により駄畜が實際に召され（朝廷により徵發され）ていないなら、必ずその價錢を出して駄畜を買ったうえで載せ、駄畜の主人が（運ぶことを）望んだら、すなわち私財を載せることを許す。（後略）『俄藏』八、三四七頁

この條文によれば、使節團員が派遣先まで個人的に商品運ぶことを條件付きながら容認している。使節團に選ばれた者は交易による私的な利益獲得の機會を西夏皇帝から與えられていたのである。

西夏の朝貢使節は單に西夏皇帝からの貢物や書狀を金朝皇帝へ送り届け、金朝皇帝からの回賜品を受け取っただけでは

なく、派遣先で私的に交易活動を行い経済的な利益を享受する機会を與えられていた。とすれば、朝貢使節の正使・副使には西夏皇帝の信任を得た官僚たちが任命されていたはずである。『金史』交聘表には、金朝の世宗・章宗の治世にあたる十二世紀後半から十三世紀初頭にかけての時期を中心に、正使・副使の官稱號と姓名がほぼ完全に記録されている。そこで、正使・副使にはどのような人々が選ばれていたのか、選出のされ方に何らかの特徴は無いのかを次節で確かめたい。

二 正使・副使の官稱號

関内勳氏は『金史』交聘表の記述を校勘・整理し、その結果を遣使の目的を問わず年代順に列挙している（関一九八六参照）。筆者は交聘表の記述を定期的なものと臨時のものとの目的別に分けたうえで、それぞれを年代順に並べることにした。表一―aは定期的に派遣した使節である賀生日使・賀正旦使、表一―bはそれ以外の臨時に派遣された遣金使節の正使・副使の官稱號・姓名を、それぞれ年代順に並べたものである。

表一―aすなわち毎年定期的に派遣される使節の官稱號は、正使は五十番（金の世宗の治世以前）までがすべて「武功大夫」、五二番以降（章宗の治世以後）は西夏滅亡開際に派遣された八九・九十番を除いて「武節大夫」となっている。「武功」が「武節」に変わったのは、避諱によるものであり、八八番までの正使は、實質的には全く同じ官稱號を名乗って入朝していたことになる。副使も、八八番までのすべてが「宣德郎」なる官稱號を名乗っている。武功・武節大夫や宣德郎に相當する官稱號は、管見の限り西夏側の文獻には見当たらないが、その語感から前者は武官、後者は文官を連想させる。武功大夫は政和二（一一二二）年以降、北宋・南宋で武階の稱號として、宣德郎は元豐三（一〇八〇）年から政和四（一一一四）年までの間、北宋で文官の寄祿官の稱號として使われている。

表一 遣金使節の正使・副使の官稱號（『金史』交聘表による）
 a 賀生日使・賀正旦使（年代〔西曆〕種別）の「生」は賀生日使、「旦」は賀正旦使を指す

番號	年代（西曆）種別	正使姓名	正使官稱號	副使姓名	副使官稱號
一	大定二（一一六一）生	賀義忠	武功大夫	高慎言	宣德郎
二	大定三（一一六三）旦	芭里昌祖	武功大夫	楊彥敬	宣德郎
三	大定三（一一六三）生	訛留元智	武功大夫	程公濟	宣德郎
四	大定四（一一六四）旦	嵬夥執信	武功大夫	李師白	宣德郎
五	大定四（一一六四）生	紐臥文忠	武功大夫	陳師古	宣德郎
六	大定五（一一六五）旦	訛羅世	武功大夫	高嶽	宣德郎
七	大定五（一一六五）生	？	？	？	？
八	大定六（一一六六）旦	高遵義	武功大夫	安世	宣德郎
九	大定六（一一六六）生	曹公達	武功大夫	孟伯達	宣德郎
一〇	大定七（一一六七）旦	劉志眞	武功大夫	李師白	宣德郎
一一	大定七（一一六七）生	任得仁	武功大夫	李澄	宣德郎
一二	大定八（一一六八）旦	利守信	武功大夫	李穆	宣德郎
一三	大定八（一一六八）生	咩布師道	武功大夫	嚴立本	宣德郎
一四	大定九（一一六九）旦	莊浪義顯	武功大夫	劉裕	宣德郎
一五	大定九（一一六九）生	渾進忠	武功大夫	王德昌	宣德郎
一六	大定十（一一七〇）旦	劉志直	武功大夫	韓德容	宣德郎
一七	大定十（一一七〇）生	張兼善	武功大夫	李師白	宣德郎
一八	大定十一（一一七一）旦	煞執直	武功大夫	馬子才	宣德郎

一九	大定十一（一一七一）生	？	？	？	？
二〇	大定十二（一一七二）旦	嵬思忠	武功大夫	劉昭	宣德郎
二一	大定十二（一一七二）生	黨得敬	武功大夫	田公懿	宣德郎
二二	大定十三（一一七三）旦	臥落紹昌	武功大夫	張希道	宣德郎
二三	大定十三（一一七三）生	芭里安仁	武功大夫	焦蹈	宣德郎
二四	大定十四（一一七四）旦	煞進德	武功大夫	李師旦	宣德郎
二五	大定十四（一一七四）生	芭里安仁	武功大夫	焦蹈	宣德郎
二六	大定十五（一一七五）旦	李嗣卿	武功大夫	白慶嗣	宣德郎
二七	大定十六（一一七六）旦	嵬宰師憲	武功大夫	宋弘	宣德郎
二八	大定十六（一一七六）生	骨勒文昌	武功大夫	王禹珪	宣德郎
二九	大定十七（一一七七）旦	訛夥德昌	武功大夫	楊彥和	宣德郎
三〇	大定十七（一一七七）生	芭里慶祖	武功大夫	梁宇	宣德郎
三一	大定十八（一一七八）旦	惡思存忠	武功大夫	武用和	宣德郎
三二	大定十八（一一七八）生	嵬茗仁顯	武功大夫	趙崇道	宣德郎
三三	大定十九（一一七九）旦	張兼善	武功大夫	張希聖	宣德郎
三四	大定十九（一一七九）生	來子敬	武功大夫	梁介	宣德郎
三五	大定二十（一一八〇）旦	安德信	武功大夫	吳日休	宣德郎
三六	大定二十（一一八〇）生	岡進忠	武功大夫	王禹玉	宣德郎
三七	大定二十一（一一八一）旦	謀寧好德	武功大夫	郝處俊	宣德郎
三八	大定二十一（一一八一）生	蘇志純	武功大夫	康忠義	宣德郎
三九	大定二十二（一一八二）生	？	？	？	？
四〇	大定二十三（一一八三）旦	劉進忠	武功大夫	李國安	宣德郎

四一	大定二十三(一一八三)生	吳德昌	武功大夫	劉思忠	宣德郎
四二	大定二十四(一一八四)旦	劉執中	武功大夫	李昌輔	宣德郎
四三	大定二十四(一一八四)生	晁直信	武功大夫	王庭彥	宣德郎
四四	大定二十六(一一八六)旦	麻骨進德	武功大夫	劉光國	宣德郎
四五	大定二十六(一一八六)生	麻骨德懋	武功大夫	王慶崇	宣德郎
四六	大定二十七(一一八七)旦	竇德昭	武功大夫	索達德	宣德郎
四七	大定二十七(一一八七)生	遇忠輔	武功大夫	呂昌齡	宣德郎
四八	大定二十八(一一八八)旦	麻奴紹文	武功大夫	安惟敬	宣德郎
四九	大定二十八(一一八八)生	渾進忠	武功大夫	鄧昌祖	宣德郎
五〇	大定二十九(一一八九)旦	紐尙德昌	武功大夫	字德賢	宣德郎
五一	大定二十九(一一八九)生	嵬茗彥 ^{マナブ}	?	劉文慶	?
五二	明昌元(一一九〇)旦	唐彥超	武節大夫	揭彥直	宣德郎
五三	明昌元(一一九〇)生	拽稅守節	武節大夫	張仲文	宣德郎
五四	明昌二(一一九一)旦	王全忠	武節大夫	張思義	宣德郎
五五	明昌二(一一九一)生	執鬼英	武節大夫	焦元昌	宣德郎
五六	明昌三(一一九二)旦	趙好	武節大夫	史從禮	宣德郎
五七	明昌三(一一九二)生	岡敦信	武節大夫	韓伯容	宣德郎
五八	明昌四(一一九三)旦	吳哆遂良	武節大夫	高崇德	宣德郎
五九	明昌四(一一九三)生	龐靜師德	武節大夫	張崇師	宣德郎
六〇	明昌五(一一九四)旦	惡惡世忠	武節大夫	劉思問	宣德郎
六一	明昌五(一一九四)生	野遇思文	武節大夫	張公輔	宣德郎
六二	明昌六(一一九五)旦	王彥才	武節大夫	高大節	宣德郎

六三	明昌六(一一九五)生	宋克忠	武節大夫	吳子正	宣德郎
六四	承安元(一一九六)旦	員元亨	武節大夫	元叔	宣德郎
六五	承安元(一一九六)生	同崇義	武節大夫	呂昌邦	宣德郎
六六	承安二(一一九七)旦	嵬茗世安 ^{マナブ}	武節大夫	李師廣	宣德郎
六七	承安二(一一九七)生	囉哆守忠	武節大夫	王彥國	宣德郎
六八	承安三(一一九八)旦	陳敏修	武節大夫	鍾伯達	宣德郎
六九	承安三(一一九八)生	折哆俊父	武節大夫	羅世昌	宣德郎
七〇	承安四(一一九九)生	李慶源	武節大夫	鄧昌祖	宣德郎
七一	承安四(一一九九)旦	紐尙德昌	武節大夫	李公達	宣德郎
七二	承安五(一二〇〇)旦	連都敦信	武節大夫	丁師周	宣德郎
七三	承安五(一二〇〇)生	連都敦信	武節大夫	丁師周	宣德郎
七四	泰和元(一二〇一)旦	臥德忠	武節大夫	劉筠國	宣德郎
七五	泰和元(一二〇一)生	柔思義	武節大夫	焦思元	宣德郎
七六	泰和二(一二〇二)旦	白克忠	武節大夫	蘇資孫	宣德郎
七七	泰和二(一二〇二)生	天籍辣忠 ^毅	武節大夫	王安道	宣德郎
七八	泰和三(一二〇三)旦	崔元佐	武節大夫	劉彥輔	宣德郎
七九	泰和三(一二〇三)生	竇德元	武節大夫	高大亨	宣德郎
八〇	泰和四(一二〇四)旦	梅訛字文	武節大夫	韓師正	宣德郎
八一	泰和四(一二〇四)生	李德廣	武節大夫	韓承慶	宣德郎
八二	泰和五(一二〇五)旦	遇惟德	武節大夫	高大倫	宣德郎
八三	泰和五(一二〇五)生	趙公良	武節大夫	米元懿	宣德郎

番號	年代（西曆）	正使姓名	正使官稱號	副使姓名	副使官稱號	遣使の目的
九一	天會二 （一一二四）	把里公亮	？			誓表を奉じる
九二	天德一 （一一五〇）	維辣公濟	丞御史中	李崇德	中書舍人	金帝の即位を賀す
九三	天德二 （一一五〇）	蘇執義	開封尹	王舉	祕書監	尊號を賀す
九四	貞元二 （一一五四）	王公佐	？			中都遷都を賀す
九五	大定二 （一一六二）	梁元輔	左金吾衛上將軍	焦景顔	翰林學士	金帝の即位を賀す

b 臨時の使節

八四	泰和六（一一〇六）旦	紐尙德	武節大夫	鄭曷	宣德郎
八五	泰和七（一一〇七）旦	隈敏修	武節大夫	鄧昌福	宣德郎
八六	泰和七（一一〇七）生	囉哆思忠	武節大夫	安禮	宣德郎
八七	泰和八（一一〇八）旦	渾光中	武節大夫	梁德懿	宣德郎
八八	泰和八（一一〇八）生	李世昌	武節大夫	米元傑	宣德郎
八九	正大三（一一二六）旦	武紹德	精鼎監	咩元禮	副儀增丞御史中
九十	正大四（一一二七）旦	王立之	精方監	？	？

九六	大定二 （一一六二）	蘇執禮	左金吾衛上將軍	王琪	監押 <small>ミヤサカ</small> 使	尊號を賀す
九七	大定三 （一一六三）	蘇執禮	金吾衛上將軍	李子美	監押使	横賜を謝す
九八	大定四 （一一六四）	梁惟忠	殿前太尉	焦景顔	翰林學士承旨	捕虜返還交渉
九九	大定六 （一一六六）	李克勤	丞御史中	焦景顔	翰林學士承旨	捕虜返還交渉
一〇〇	大定六 （一一六六）	賀義忠	丞御史中	楊彥敬	翰林學士	横賜を謝す
一〇一	大定七 （一一六七）	芭里昌祖	殿前太尉	趙衍	樞密承旨	醫館に請遣を要派
一〇二	大定八 （一一六八）	任德聰	？			醫館に請遣を要派
一〇三	大定十 （一一七〇）	浪訛進忠	左樞密使	楊彥敬	參知政事	任得敬を要請
一〇四	大定十 （一一七〇）	芭里昌祖	殿前太尉	高岳	樞密學士	任得敬を要請
一〇五	大定十二 （一一七二）	訛羅紹甫	殿前太尉	呂子溫	樞密學士	尊號を賀す
一〇六	大定十二 （一一七二）	岡榮忠	殿前太尉	嚴立本	樞密學士	横賜を謝す

一一八	一一七	一一六	一一五	一一四	一一三	一二二	一一一	一一〇	一〇九	一〇八	一〇七
明昌二 (一一九二)	明昌二 (一一九二)	明昌元 (一一九〇)	大定二九 (一一八九)	大定二九 (一一八九)	大定二九 (一一八九)	大定二七 (一一八七)	大定二五 (一一八五)	大定二〇 (一一八〇)	大定一八 (一一七八)	大定一七 (一一七七)	大定一五 (一一七五)
李嗣卿	李元膺	閔進忠	廼令思敬	鄒顯忠	李元貞	訛羅紹先	李崇懿	閔永德	浪訛元智	蘇執禮	訛羅紹甫
府知中興	軍衛左金吾	府知興中	府知事興中	丞御史中	尉殿前太	尉殿前太	夫御史大	丞御史中	尉殿前太	使東經略	中興尹
永昌	高俊英		梁介	李國安	餘良	嚴立本	米崇吉	劉昭	劉昭		王師信
樞密直 學士	丞御史中		監祕書少	士翰林學	士翰林學	學樞密直	中興尹	學樞密直	士翰林學		士翰林學
奉奠	死皇(金)后 陳慰(金)の	謝賜を 横す	賀す 即位を 金帝の	奉奠	死(金)帝 陳慰(金)の	謝賜を 横す	す還(金)帝 行幸歸の	奏告	謝賜を 横す	横進	謝賜を 横す

一二九	一二八	一二七	一二六	一二五	一二四	一二三	一二二	一一一	一一〇	一一九
泰和二 (一二〇二)	泰和元 (一二〇一)	承安五 (一一〇〇)	承安四 (一一九九)	承安二 (一一九七)	承安二 (一一九七)	明昌六 (一一九五)	明昌五 (一一九四)	明昌四 (一一九三)	明昌四 (一一九三)	明昌四 (一一九三)
李建德	野遇思文	劉忠亮	廼令思聰	李嗣卿	李德冲	李彦崇	浪訛文廣	咩銘友直	李元吉	廼令思聰
尉殿前太	軍衛左金吾	徵使南院宣	尉殿前太	尉殿前太	府知中興	夫御史大	丞御史中	尉殿前太	夫御史大	丞御史中
楊紹直	田文徽	高永昌	楊德先	高德崇	劉思問	郝庭俊	劉俊才	李昌輔	李國安	
府知中興	府知中興	府知中興	學樞密直	府知中興	學樞密直	府知中興	學樞密直	學樞密直	士翰林學	
謝賜を 横す	謝進物を	謝恩	謝賜を 横す	す開榷場 再を謝	請開榷場 再を要	謝進物 西帝への皇	謝冊立 西帝を新	上物帝西 の夏皇を	帝西告 死立哀 去(皇)	謝賜を 横す

一三〇	泰和五 (一二〇五)	廼來思聰	尉殿前太	劉俊德	府知中興 通判	謝賜を 横す
一三一	泰和六 (一二〇六)	岡佐執中	夫御史大			西夏新 皇帝立を 要冊請
一三二	泰和六 (一二〇六)	謀寧光祖	夫御史大	張公甫	翰林學 士	西夏新 皇帝の 冊立を 謝す
一三三	泰和八 (一二〇八)	李元吉	樞密使	羅世昌	觀文殿 大學士	奏告

一三四	泰和八 (一二〇八)	習勒遵義	尉殿前太	蘇寅孫	樞密都 承旨	西夏の 帝への 進物を 謝す
一三五	泰和八 (一二〇八)	權鼎雄	夫御史大	李文政	樞密直 學士	横賜を 謝す
一三六	泰和八 (一二〇八)	浪訛德光	事參知政	田文徽	夫光祿大	モンゴ ル軍を 襲を報 告
一三七	正大二 (一二二五)	李仲諤	夫光祿大 書吏部尙	羅世昌	南院宣 徽使	和議成 立を奉 表する

一方、表一―bすなわち臨時に派遣される使節の官稱號は正使・副使とも様々な官稱號を帯びている。このような官稱號は西夏に實在するのだろうか。『宋史』夏國傳では、十一世紀前半の李元昊（景宗）時代における西夏の官司について列舉しているが、その中に表一―bに現れる「中書」「樞密」「御史」「開封」の名が記載されている。⁽⁹⁾十二世紀末に西夏で國內向けに刊行された西夏語・漢語對譯用語集『番漢合時掌中珠』（以下、掌中珠と略す）⁽¹⁰⁾にも、漢語で「中書」「樞密」「經略司」「殿前司」「御史」「宣徽」の官司名や「承旨」の職名が載録されている。

このほか、『宋史』夏國傳には、

（紹興）三十一（一二六一）年、翰林學士院を立て、焦景顔・王僉等を以て學士と爲し、實錄を修せしむ。⁽¹¹⁾

とある。表一―bによると、焦景顔は九五・九八・九九番の副使として金朝へ派遣されている。その時に帯びていた官稱號はいずれも翰林學士であり、『宋史』夏國傳の記述と一致する。したがって、臨時に派遣される使節には、西夏に實在する官司の長官・次官級の稱號を帯びた者が遣金使節の正使・副使として派遣されていたことになる。『天盛禁令』卷十

表二 西夏における官司の等級と長官・次官の定員（『天盛禁令』卷十より）

官司の等級		官司名	長官（定員）	次官（定員）
上等	中書	中書	大人（六）	承旨（六）
	樞密	樞密	大人（六）	承旨（六）
	（上等に準ずる）	經略司	？	？
	中興府	中興府	正（八）	承旨（八）
	殿前司	殿前司	正（八）	承旨（八）
次等	御史	御史	正（六）	承旨（六）
	大都督府	大都督府	正（六）	承旨（六）

中等	三司	正（四）	承旨（八）
	内宿司	置かれず	承旨（六）
	宣徽	正（四）	承旨（四）
	鳳匣司	正（四）	承旨（四）
	閤門司	置かれず	奏知（四）
（次等に準ずる）	御庖厨司	大人（二）	置かれず
	祕書監	？	？
	番・漢大學院	？	？
中等	都磨勘司	正（四）	承旨（四）

「官司の順序と文書を送る門」では、各官司の等級と、長官・次官の稱號や定員が定められている（表二参照）。おもに長官は「正」、次官は「承旨」と表現されているが、彼らが金朝に入朝し、自らの官稱號を漢語で表現する際には、西夏語からの直譯ではなく中國風の稱號に替えた（例えば、西夏國內では「御史正」と稱する稱號を、金朝向けには「御史大夫」に、同様に「御史承旨」を「御史中丞」に、「中興府正」を「知中興府（事）」のように）ものと考えられる。宋・金そして西夏の文獻を通じて表一—bに現れる官司名の多くが、西夏に實在する官司の名であることは明らかである。

そして表一—aと同様、表一—bの場合も「左金吾衛上將軍」や「殿前太尉」といった武官を想起させる稱號は正使のみが、「祕書監」や「樞密直學士」といった文官あるいは宋朝のエリート科擧官僚が帯びた館職⁽¹²⁾を想起させる稱號は副使のみが帯びている。表一—a・表一—bをあわせて考えると、正使は武官風、副使は文官風の稱號を帯びる傾向を示していると言つてよい。

三 服裝の異なる二つの官僚集團

『宋史』夏國傳には、西夏の官人に武官と文官の別が李元昊の治世の時代からあり、次のように服裝も異なっていたことが記されている。

文資なれば則ち幘頭・鞞笏・紫衣・緋衣にして、武職なれば則ち金帖起雲縷冠・銀帖間金縷冠・黑漆冠を冠し、紫旋欄・金塗銀束帶を衣て、蹀躞を垂らし、解結錐・短刀・弓矢鞬を佩く。⁽¹³⁾

文資すなわち中國の文官に相當する官人は幘頭をかぶつてゐるとある。一方、武職は、唐朝や西ウイグル王國などの武官と同様、蹀躞を着用してゐる。⁽¹⁴⁾

文官と武官の定義については次章で述べることにするが、上記のような服裝の區別は十二世紀後半にも保たれていたのだろうか。南宋の樓鑰が書き記した『北行日録』は、乾道五（一一六九）金の大定九（一一六九）年末から翌年にかけて、南宋から金朝への賀正旦使の使節團員として派遣された時の見聞録である。ここでは、金朝皇帝との謁見の際に目撃した西夏と高麗の使節團の構成と服裝について、次のように記述している。

是の日（十二月二十九日）、高麗・西夏の使人と同一に見ゆ。高麗の使は三綱にして、衣冠は本朝の如し、一は賀正を爲し、一は遣使を謝し、一は羊酒を賜るを謝す。上節は幘頭・犀偏帶、中節は折上巾・犀束帶、下節は獻頂巾・犀束帶にして、皆な紫衫なり。西夏の使は二綱にして、一は賀正、一は遣使を謝す。皆な王子を以て正使と爲し、金冠を戴き、製作甚だ工なり。朱袍・蹀躞にして、狀貌甚だ偉なり。副使の衣冠、高麗人の如し。三節は皆な入見せず、椎髻被髮、小巾尖帽にして、皆な夷服なり。⁽¹⁵⁾

西夏の正使は金冠をかぶり、蹀躞を着用するという點で、『宋史』夏國傳の「武職」の服裝と一致する。また副使は高麗使と似た「本朝（『南宋』）風であったという。『北行日録』が伝える西夏の正使の服裝は『宋史』夏國傳が伝える「武

職」の服装と、『北行日録』の副使の服装は『宋史』夏國傳の「文資」の服装と、それぞれ共通するものがいくつか見受けられる。『宋史』夏國傳が伝える李元昊時代の衣冠制度が、十二世紀後半にも大きな變化が無く、『北行日録』が伝える正使は武官、副使は文官であったと考えてよいだろう。そしてその服制は『金史』交聘表に現れる正使が武官風、副使が文官風の官稱號を帶びる傾向ともよく對應している。

四 再任のされ方

正使・副使の官稱號の名乗り方に一定の傾向があることは明白になった。では、そのような名乗り方が十二世紀後半における西夏の官制研究にどのような意義を持つのか。朝貢使節や中國王朝が諸外國へ派遣する使節の正使・副使が、臨時に任命前の實職よりも格上の稱號や位階を與えられたうえで派遣されることは、隋唐時代でも一般的に行われている。⁽¹⁶⁾だが、西夏の遣金使節への任命のされ方にはある種原則があるように思える。その根據は正使・副使として複数回採用された人物（再任者）の任命のされ方にある。

表一—aと表一—bを改めて通覽すると、同一人物が二回ないしは三回正使・副使として派遣されている例が少なからず見られ、その數はあわせて二十八名にのぼる。初回到正使を経験した者を**表三—a**、副使を経験した者を**表三—b**に分けて掲げてみると、ある特徴が見られる。初回到正使を経験した者は再任時にも正使に任命されており、初回到副使を経験した者は再任時にも副使に任命されている。つまり副使が再任時に正使へ昇格する例は皆無なのである。同じ『金史』交聘表に記載されている金朝から南宋へ派遣された使節の場合、再任の例は少ないものの、初回到副使として派遣された者が再任時には正使に昇任する例が見られるという。⁽¹⁷⁾これに對し、副使が二回目以降に正使へ昇任する例が皆無であるという西夏の遣金使節の再任傾向は注目値する。

副使が再任時に正使へ昇格する例が無いのは何故か。筆者は、西夏において二つの別々の官僚集團が存在しており、正

表三 遣金使節の正使・副使再任者一覽

a 初回正使経験者

姓名	年代（西暦）種別	表一の番號	身分	官稱號
賀義忠	大定二十九（一一六二）生 大定六（一一六六）	a 一 b 一〇〇	正使 正使	武功大夫 御史中丞
芭里昌祖	大定三（一一六三）旦 大定七（一一六七） 大定十（一一七〇）	a 二 b 一〇一 b 一〇四	正使 正使 正使	武功大夫 殿前太尉 殿前太尉
渾進忠	大定九（一一六九）生 大定二十八（一一八八）生	a 一五 a 四九	正使 正使	武功大夫 武功大夫
張兼善	大定十（一一七〇）生 大定十九（一一七九）旦	a 一七 a 三三	正使 正使	武功大夫 武功大夫
芭里安仁	大定十三（一一七三）生 大定十四（一一七四）生	a 三三 a 二五	正使 正使	武功大夫 武功大夫
岡進忠	大定二十（一一八〇）生 明昌元（一一九〇）	a 三六 b 一一六	正使 正使	武功大夫 知中興府
紐尙德昌	大定二十九（一一八九）旦 承安四（一一九九）生	a 五〇 a 七一	正使 正使	武功大夫 武功大夫
野遇思文	明昌五（一二九四）生 泰和元（一二二〇）	a 六一 b 二二八	正使 正使	武功大夫 左金吾衛上將軍
連都敦信	承安五（一二二〇）旦 承安五（一二二〇）生	a 七二 a 七三	正使 正使	武功大夫 武功大夫

b 初回副使経験者

姓名	派遣年（西暦）種別	表一の番號	身分	官稱號
蘇執禮	大定二（一一六二） 大定三（一一六三） 大定十七（一一七七）	b 九六 b 九七 b 一〇八	正使 正使 正使	左金吾衛上將軍 金吾衛上將軍 東經略使
訛羅紹甫	大定十二（一一七二） 大定十五（一一七五）	b 一〇五 b 一〇七	正使 正使	殿前馬步太尉 中興尹
李嗣卿	明昌二（一一九一） 承安二（一一九七）	b 一一八 b 一二五	正使 正使	知中興府 殿前太尉
迺令思聰	明昌四（一一九三） 承安四（一一九九）	b 一一九 b 一二六	正使 正使	御史中丞 殿前太尉
李元吉	明昌四（一一九三） 泰和八（一二〇八）	b 一二〇 b 一三三	正使 正使	御史大夫 樞密使
楊彥敬	大定三（一一六三）旦 大定六（一一六六） 大定十（一一七〇）	a 二 b 一〇〇 b 一〇三	副使 副使 副使	宣德郎 翰林學士 參知政事
李師白	大定四（一一六四）旦 大定七（一一六七）旦 大定十（一一七〇）生	a 四 a 十 a 十七	副使 副使 副使	宣德郎 宣德郎 宣德郎
嚴立本	大定八（一一六八）生 大定十二（一一七二）	a 十三 b 一〇六	副使 副使	宣德郎 樞密直學士

	大定二十七(一一八七)	b 一一二	副使	樞密直學士
劉昭	大定十二(一二七二) 旦	a 一一〇	副使	宣德郎
	大定十八(一二七八)	b 一〇九	副使	翰林學士
	大定二十(一二七八)	b 一一〇	副使	樞密直學士
焦蹈	大定十三(一二七三) 生	a 一三三	副使	宣德郎
	大定十四(一二七四) 生	a 一二五	副使	宣德郎
梁介	大定十九(一二七九) 生	a 一三四	副使	宣德郎
	大定二十九(一二七九)	b 一一五	副使	祕書少監
李國安	大定二十三(一一八三) 旦	a 一四〇	副使	宣德郎
	大定二十九(一一八九)	b 一一四	副使	翰林學士
	明昌四(一二九三)	b 一二〇	副使	翰林學士
李昌輔	大定二十四(一一八四) 旦	a 一四二	副使	宣德郎
	明昌四(一二九三)	b 一二二	副使	樞密直學士
鄧昌祖	大定二十八(一二七八) 生	a 一四九	副使	宣德郎

使・副使にはそれぞれの官僚手段から任命するという原則が存在していたのではないかと考える。次章では西夏側の文獻から二種類の官僚集團がどのようなものなのか論じていく。

二 『天盛禁令』編纂者リストに現れる官僚集團

一 官稱號の帶び方の特徴

『天盛禁令』冒頭には、通稱「進律表」と呼ばれる編纂に關與した二十三名の官稱號と姓名を西夏語で列舉したリスト

	承安四(一一九九) 旦	a 一七〇	副使	宣德郎
劉思問	明昌五(一一九四) 生	a 一六〇	副使	宣德郎
	承安二(一一九七)	b 一二四	副使	樞密直學士
羅世昌	承安三(一一九八) 生	a 一六九	副使	宣德郎
	泰和八(一二〇八)	b 一三三	副使	觀文殿大學士
	正大二(一二二五)	b 一三七	副使	南院宣徽使
丁師周	承安五(一二〇〇) 旦	a 一七二	副使	宣德郎
	承安五(一二〇〇) 生	a 一七三	副使	宣德郎
焦景顔	大定二(一一六二)	b 九五	副使	翰林學士
	大定四(一一六四)	b 九八	副使	翰林學士
	大定六(一一六六)	b 九九	副使	樞密都承旨
田文徽	泰和元(一二〇一)	b 一二八	副使	知中興府
	泰和八(一二〇八)	b 一三六	副使	光祿大夫

が記されている（以下、編纂者リストと略す）。西夏の官僚が実際にどのような稱號を名乗っていたかを知るうえでは最もまとまった史料である。『俄藏』八、四七―四八頁に寫眞が掲載されているが、不鮮明である。そこで本稿では、筆者が『天盛禁令』を所蔵しているロシア科學アカデミー東方學研究所サントルペルブルク支部で實見調査した結果を基に、譯文を掲げる（□は調査の結果、判讀不能の字。括弧内は筆者による補足。便宜上、冒頭に番號を附している）。

- | | | | | | | |
|----|---------|-------------|-------------|-------------|------|-------|
| 1 | 北王兼中書令 | | 嵬名地嶽 | | | |
| 2 | 中書令 授茂清 | 文孝恭敬東南姓官上國柱 | 嵬名義告 | | | |
| 3 | 中書智滿 | 授敏盛 | 文孝恭敬東南姓官上國柱 | 嵬名地遠 | | |
| 4 | 樞密東拒 | 授覆全 | 文孝恭敬東南姓官上國柱 | 嵬名仁善 | | |
| 5 | 中書勤辨 | 樞密權 | 授養孝 | 文孝恭敬東南姓官上國柱 | 代勒□寧 | |
| 6 | 中書副 | 授義持 | 文孝恭敬東南姓官定地鎮 | | 嵬名典□ | |
| 7 | 中書副 | 授義觀 | 文孝恭敬東南姓官上國柱 | | 賀夫 | |
| 8 | 樞密名人 | 授益盛 | 文孝恭敬東南姓官定地鎮 | | 嵬名忠信 | |
| 9 | 中書同副 | 授覆全 | 文孝恭敬東南姓官上國柱 | | 范史單 | |
| ⑩ | 正集議□ | 樞密 | 內宿等承旨 | 殿前司正 | 內宮馬騎 | 哇勒干領權 |
| 11 | 東經略使副 | 樞密承旨 | 三司正 | 漢學士 | | 趙資 |
| 12 | 樞密承旨 | 御史正 | 祕書少監 | 漢大學院博士 | 內宮馬騎 | 楊令 |
| 13 | 中書承旨 | 閣門奏知 | 甌匣司正 | 漢大學院博士 | 內宮馬騎 | 白盛 |
| ⑭ | 中書 | 內宿司等承旨 | 甌匣司正 | | | 浪兀心□□ |
| ⑮ | 御前稚門官 | 內宿承旨 | 御厨庖 | 甌匣司等正 | | 楊邪道□ |

①⑥ 御前稚門官 殿前司正

臥跋□

①⑦ 中書 内宿司等承旨 中興府副

寇名盛山

18 御前稚門官 樞密承旨 漢學士

酒經昭

①⑨ 殿前司正 樞密俱威

頭大心善

20 漢文と合わせる者 (閣門) 奏副 中興府正 漢大(學)院博士

楊□忠

21 漢文を譯す者 西京尹 漢學士

訛沒饒稱

22 漢文を譯し禁令を定める者 漢學士 大都督府同判

芭里俱躍

23 漢文を譯す者 番大學院博士 磨勘司承旨 學士

蘇悟盛

上記リストの二―九番目の人物の官稱號のうち、「授」の直後に續く二文字の稱號、さらにそれに續く「文孝恭敬東南姓官上國柱」や「文孝恭敬東南姓官定地鎮」の稱號はいずれも實職を表示するものではない。西夏の官稱號には、實職を表示する職事官に相當する稱號と、實職を表示しない位階のようなものを表示する稱號の二種類が存在していたことが、西夏側の他のカラホト出土文獻によってすでに明らかになっており、上記の稱號は後者の例である。⁽¹⁸⁾ つづいて實職をあらわす表示に注目すると、一・二番目の人物は最上位の中書令、⁽¹⁹⁾そして三―九番目には西夏の行政・軍事それぞれの最重要機關である中書・樞密の長官七名が名を連ねている。西夏では中書令や中書・樞密の長官を「議判(＝宰相)」と總稱し、中書・樞密の次官以下の官僚よりも高い地位であるとされている。⁽²⁰⁾

十番目以降のほとんどの稱號は、官司の長官・次官の實職を表す稱號であり(表二参照)、位階のようなものを表示する稱號は省略されている。また十番目以降の多くは、複数の官司の長官または次官を兼任している。たとえば十番目の人物は樞密の次官と内宿司の次官、そして殿前司の長官を同時に名乗っているのである。⁽²¹⁾ また、同一の職名を複数の人物が名乗っている例も少なくない。例えば甌匣司の長官(甌匣司正)を名乗る人物は三名現れている。

から二十歳までを學院の中に集めて選拔し、學藝を學ばせん。學ぶ所を管掌する博士や正・副の教師が金品を取ることは許さない。(中略) 學んでいる人の中で、學藝で奉仕し學士の中に入れるならば、位階を上下するところなく、自ら帳簿に記録し、官僚の中に(入れん)。(後缺)「俄藏」八、二二七頁。□は缺損部分

とある。缺損が多く、條文の全體像はつかみにくい。が、「學院」と呼ばれる官僚養成機關で教育を受け、その中で有能な人材は「學士」の稱號を與えられ、官僚として登用されていくこと、その學院を「博士」と呼ばれる者が管掌していることがうかがえる。

上の條文のような官僚登用法が、實際に行われていたことを裏付ける史料として注目されるのが、ロシア科學アカデミー東方學研究所サント＝ペテルブルク支部所藏カラホト出土西夏文二七三六號文書である。この文書は、十三世紀前半、西夏滅亡の直前にカラホト(當時の名稱は黒水)に左遷された沒寧仁負なる役人が皇帝に轉勤を願い出ようとした手紙である。その文中には、仁負の經歷に關する次のような記述がある。

(前略) この仁負めは、かつて才臣の學道を経た遠地の鳴沙の家主人である。これまでご公家の大小のお仕事を受け持ち、監邪眞(?)・監軍司・肅州・黒水の四つの役所に赴いた。ネズミの年より今に至るまで九年になり、七十七(歳)になる老いた一人の母と家畜・財産と共に一帳を有している。今實に(母は)老い、病が重くなり、家族と一緒に家に留まっている。それより以來、互いに顔をあわせず、別な土地に左遷されたので、重ねて(私を)召還し、交代し、老いた母の居所に近接する所に派遣するよう求めて言っているうちに、その時學院に居た、長年居た者である都師(?)の人とお互い疎遠になったので、昇進はまだ得られず、遠地の役所で(範圍の)同じくないところへ飛ばされ、長年居させられた。(後略)⁽²³⁾

沒寧仁負は、自らを「才臣の學道を経た」者と稱している。さらに「學院」にいた「都師」なる人物と不和になったため昇進が妨げられていたとの文脈からは、學院が官僚の配屬を決める上で重要な役割を果たしていたことがうかがえる。

時代がさらに下るが、元初に活躍した西夏人儒者高智耀の傳記史料のうち、『廟學典禮』⁽²⁴⁾には西夏時代の官僚登用法にまつわる次のような記述がある。

高學士、諱は智耀、字は顯道、河西中興路の人なり。世々西夏の顯族たり。曾祖の某、蕃科の第一に擢せられ、祖の某、仕えて大都督府尹に至り、父の某、仕えて中書右丞相に至る。夏は蕃・漢二科を設けて士を取る。蕃科の經賦は漢と等しく、特だに文字異なるのみ。公、巍然として擢第せられ僉判を授けらる。⁽²⁵⁾（後略）

この記述によると、西夏では蕃科と漢科の二つの學科試験を設けて官僚を採用しており、高智耀や彼の祖先は蕃科で採用され、官僚として活躍したという。そして蕃科と漢科の違いは使用する言語にあるとする。「蕃」は「番」に通じ、タングート人を指す。蕃科とはタングート人の言葉すなわち西夏語の學科試験、漢科とは漢語の學科試験ということになる。試験の内容は中國王朝の科擧に似た儒教經典や詩に關するものであったらしい。『天盛禁令』編纂者リストには「番大學院」「漢大學院」の二つの機關名が存在する。官僚養成機關である「學院」は、使用する言語によって二つの別々な機關が設置されたのである。

以上の考察から、『天盛禁令』編纂者リストに現れる「博士」「學士」の稱號は、官僚養成機關で學業を積んだ者、ないしは官僚養成機關を管掌する役割を擔う者に與えられる稱號・職名と考えられるのである。

三 「殿前司」「内宿司」の集團

もう一系統の官僚集團と見られる「殿前司」「内宿司」とは、具體的にどのような機關なのか。『天盛禁令』卷十二「内宿待命等の事項門」・第八九一條「帳門後寢等の抄（軍團の最小單位）を解任し、引き繼ぎ代える」には、

一、帳門後寢・内宿外護の御使・表の内侍等で（任を）解き、（後任に）引き繼ぎ代えるところの數は、みな殿前司を通せん。（後略）『俄藏』八、二七二頁

とある。條文中に現れる「帳門後寢」「内宿外護の御使」「表の内侍」とは、後述するように、いずれも宮殿内部の皇帝の居所に控える宿衛兵の集團とみられる。そして、このような集團を交代させるには、殿前司の許可が要るとされている。殿前司は宮中の宿衛兵を管掌する機關と考えてよいだろう。

次に内宿司については、『天盛禁令』に實質的な長官である「内宿承旨」の職掌を窺わせる條文がいくつか存在する。

卷十二「内宿待命等の事項門」・第八六五條「官僚等が仕事もないのに自らの意志で任意に（内宮）中へ来る」には、

一、仕事の無い諸々の大小の臣僚・僧侶・道士その他の人等が内宮へ行く大小の（用事を）有するならば、すなわち仕事を管轄する者たちは内宿承旨のところを経由せん。（入内を）許すべきならば、（中へ）行かせん。もし回答してないのに自らの意志で（内宮の中へ）来た時には、人が（内宮で）亂れる規定により判決する。『俄藏』八、二六七

頁

とあり、西夏の官僚や僧侶等は内宿承旨の許可がない限り、内宮（宮中）に入ることができないとされている。内宿承旨は宮中を出入りする人員を監視する重要な役割を擔っているのである。したがって、内宿承旨の所屬する内宿司という機關は、皇帝の側近に仕えて宮中の庶務を司る機關ということになる。

以上をまとめると、『天盛禁令』編纂者リストに現れる二つの官僚グループのうち、「殿前司」「内宿司」の稱號を持つ官僚は、皇帝の側近に仕えて雜務を行うことや、宿衛兵を管掌する職務を持ち、一方の「博士」「學士」の稱號を持つ官僚は、官僚養成機關の教職員、あるいはその官僚養成機關での教育を経て官僚となった集團であったことが確認できる。前章では『金史』交聘表に現れる官稱號が正使は武官風、副使は文官風の稱號であるという傾向を指摘したが、改めて表一Ⅰbを見ると、殿前司の長官の名を中國風の稱號に替えた「殿前太尉」は正使に、「學士」で終わる稱號を持つ使節は副使にのみ現れる。遣金使節の正使が武官風、副使が文官風の稱號を帯びるのは、やはり西夏に二系統の官僚集團が存在していたことを反映していると見るべきであろう。本稿では便宜上、「學士」「博士」の稱號を持つ官僚を文官系官僚、「殿

前司」「内宿司」の稱號を持つ官僚を武官系官僚と呼ぶことにする。武官系が軍事を擔當する官僚、文官系が一般行政を擔當する官僚という職掌による區別を示すものではなく、あくまで採用ルートの違いで區別しているに過ぎないことをお断りしておく。

四 武官系官僚の採用法

文官系官僚が官僚養成機關を経て登用されたことはすでに明らかにした。では、武官系官僚はどのような方法で採用されていたのであろうか。「學士」の稱號を兼帶している者が皆無であることから、彼らが官僚養成機關を経て登用されたわけではなく、別な方法で採用されていたことが豫想される。

『天盛禁令』卷六「軍人使の浅い規定」・第三四五條「重い職を受け持つ私人が推舉して利益を求める」には、

一、大小の臣僚・待命者の諸々の人が良い才藝を有する人を役人のところへ告げ連れてきて、朝廷のために奏上することを許す。(後略)『俄藏』八、一四三頁

とあり、官僚や待命者(後述)が有能な人材を官僚に推舉することを認めている。

時代は下るが、西夏の遺臣で、元初に活躍した昔里鈴部なる人物の神道碑の文中には、彼自身と祖先の西夏時代における経歴について次のように記されている。

(前略)公(『昔里鈴部』諱は益立山、其の先、沙陁の貴種に係る。唐亡び、子孫陝隴の間に散落す。遠祖の仲と曰う者、其の伯と避地して五臺山谷に通れ、復た世故を以て酒泉郡の沙州に徙り、遂に湖西(河西の誤り)の人と爲る。顯祖府君、夏國の中省官兼判樞密院事を歴る。皇考府君、綬爵を用て肅州の鈴部を受け、其の後因りて官稱を以て號と爲す。喪亂もて譜亡われ、遂に名諱を逸す。公、昆弟四人なるも、獨だに公のみは少くして氣節を負い、儒釋に通じ、音律に洞曉すれば、廢を以て宮省に僣直し、積勞して沙州の鈴部に調せらる。(後略)⁽²⁶⁾

昔里鈴部は、前節であげた高智耀のように蕃科や漢科によって採用されたのではなく、「廕（恩蔭）を以て」宮中での宿衛の任につき（「倭直」）、その後地方官へと遷轉していったとする。

西夏側の文獻では、昔里鈴部のように宮中で宿直・奉仕する者を「待命者」（西夏語を直譯すると「命令を待つ者」と呼んでいた。舊西夏領だった地域からは「内宿待命」という意味の西夏文字が彫られた牌子が數點發見されている。その持ち主は「待命者」であつたに違いない。『天盛禁令』卷十二「内宮の待命者等の事項門」・第八二五條「内宮に宿直する職を持つ人が酒を飲む」の第一項には、

（次の）待命者が宿直（の當番）であるのに酒を飲んだ時、位階を持たない者は一ヶ月（の徒刑）、位階を持つ者は罰馬二（頭）。

内宿承旨 醫者 帳門後寢 内宿 御使 ご公家を外で護る（者） 表の内侍 閤門 前内侍 内侍承旨『俄藏』
八、二六〇頁

とあり、「待命者」は様々な職名を持ち、宮中で宿直を行なっていた。これらのうち、「閤門」は朝見の儀式や百官の上奏を中繼する役⁽²⁷⁾。「前内侍」は他國へ朝貢使節として派遣される場合に隨行し、朝貢・回賜品のすり替えを防ぐための封印を押す役割を擔っていることが確認されている。⁽²⁸⁾「帳門後寢」「表の内侍」は宮中内の衛兵であり、宿直する場所によって名稱が異なる。同じく『天盛禁令』卷十「官位・軍の任命門」・第六四五條「前内侍等が承認したら抄を如何にするか」では、「前内侍・帳門後寢のうち、職位を得て臣僚の中に入った時、（後略）」と、彼らが官僚として昇進していくことが想定されている。さらに、一一八〇年にカラホトで書寫された西夏文佛典『聖大乘大千國守護經』の奥書には、

（經典を）寫す願いを發した者、黒水（カラホト）の主 臣僚 前内侍 嵬名石腰⁽²⁹⁾

なる記述が見られる。發願者の嵬名石腰は前内侍の稱號を帯びたまま、黒水城主として、すなわち官僚として職についているのである。宮中で勤務していた者が官僚として昇進していくことを示す好例である。

宮中の宿直については、『宋史』夏國傳の李元昊時代の記述に既に現れている。すなわち、

興・靈（西夏の都のあった中興府およびその周邊を指す）の兵、精練なる者又た二萬五千、別に副うるに兵七萬を以て資贍と爲し、御圍内六班と號し、三番に分ち、以て宿衛せしむ。⁽³⁰⁾

豪族の弓馬を善くするもの五千人を選びて迭いに直せしめ、六班直と號し、月ごとに米二石を給す。⁽³¹⁾

と、皇帝の一族ではなく豪族の中から選拔し、交代で宿衛の任につかせていたとある。建國期以來、西夏では、有事には國內の部族長が配下の遊牧民や農民を率いて軍團を組織し戰鬪に参加した。⁽³²⁾ 西夏側の文獻ではこのような軍團を率いる部族長を「首領」と總稱している。首領は少なくとも六十名以上の兵を率い、⁽³³⁾ 同時に朝廷の職を兼務する者もいた。⁽³⁴⁾ 軍團の中には首領以下、中隊長や小隊長にあたる小首領・房主と稱する者もいた。『天盛禁令』卷六「行帥・隊の首領・房主の派遣門」・第三八五條「小首領・房主を遣わす」には、

一、軍・待命・特差・牧農主の首領の配下の小首領・房主が以前（の條文）に明らかなもの以外、小首領・房主の範圍が明らかでない中に所屬している首領・族父が願っているならば、自ら有している二十抄以上で小首領一人、及び十抄以上で房主一人を、それぞれ勇猛な人で（任に）堪えられる方を首領の者から盈能に換える。所屬については、監軍司の者がどの職を管轄する所の盈能に換えるべきか（検討し）、殿前司を通じて言葉が眞實であれば、すなわち奏上し（しかるべき職に）遣わさん。『俄藏』九、五頁

とある。軍團を率いる小首領や房主と呼ばれる小隊長の中から有能な者を「盈能」と稱して何らかの職を與える機會があったらしい。そうした人材を推薦する権限は首領にあることがうかがえる。

では、武官系官僚にはどのような者が採用されたのか。多民族によって構成されている西夏において民族や部族による區別はあったのであろうか。西夏ではタングート人の姓を「族姓」と表現し、出身の部族名を指す。その姓は二文字で書かれる。一方、漢人の姓は一字で書かれる。ここで改めて『天盛禁令』編纂者リストの姓名に注目したい。

一〇九番目の宰相クラスでは、過半数の六名が皇帝と同じ嵬名姓である。⁽³⁵⁾一方、皇帝の側近集團が多い十番目以降では、「學士」「博士」系は一字姓の漢人、「内宿」「殿前」系は一字姓の漢人よりも二字姓のタングート人が多い傾向を示しているが、様々な姓を持つ者が名を連ねている。皇帝と同じ嵬名姓を名乗っているのは、わずかに十七番目の一名のみである。建國期の李元昊時代から百年以上を経た時代においても様々な民族・部族から官僚が採用されていたことを雄辯に物語っている。

ここで、表一—a・bの『金史』交聘表に現れる遣金使節正使・副使の姓名に注目すると、やはり定期・不定期の使節とも様々な姓を持つ者が任命されている。嵬名（原文には嵬名と記される）姓の者は正使に三名現れるのみである。そしてタングート人とみられる二字姓の者は、表一—a・bとも正使にのみ出現し、副使には皆無である。『天盛禁令』編纂者リストの武官系官僚にタングート人が、文官系官僚に漢人が多いという傾向と類似している。

そもそも、中國では使節の正使・副使として文官と武官をペアで派遣する場合、正使は文官、副使は武官となることが一般的である。西夏の場合、正使が武官風の稱號、副使が文官風の稱號と、正反對の傾向を示すわけであるが、それはなぜか。

その理由の一つとして考えられるのが、出身の民族による格差の存在である。例えば『天盛禁令』卷十「役所の順序と文書を送る門」・第七〇四條「ミ（ミニヤクタングート）・漢等が職を共有する」には次のようにある。

一、職を持つ人で、ミ・漢・チベット・ウイグル等が職を共有するとき、職位の上下と職名が同じくない（場合）は、各々上下を定めるところにより座らせん。それ以外に、職名が同じく、職位も等しい場合は、位階の上下を考えずにミの人を大（上）にせん。（後略）『俄藏』八、二二七頁

同一官司内での上下関係や朝見などの儀式の際の席次を定めた本條文は、同じポストにタングート人とそれ以外の出身の者が就いている場合の序列は、タングート人が上位に扱われるべきであると定めている。皇族嵬名氏をはじめとするタ

ングート人が中心となつて建國された西夏では、タングート人を上位に置こうとする意識が政權側にあり、その意識が條文の中にも反映されていたに違いない。したがつて、朝貢使節を派遣する場合も、武官系官僚の多いタングート人を上位に置くという意識を反映して、副使ではなく正使として派遣したものともみられる。

武官系官僚は文官系官僚のように官僚養成機關での教育を経ることなく、恩蔭や、官僚あるいは部族長からの推舉などによつて拔擢された集團であつた。彼らの多くは宮中で宿衛として皇帝の身の回りの警護や雜務をこなし、その後官僚として遷轉していった。文官系官僚とは一線を劃した昇進ルートが十二世紀後半にも存在していたのである。そして、タングート人の優位性を意識した結果、遣金使節でも正使には常に武官系官僚が任命されていたものと考えられる。

おわりに

本稿では、遣金使節の人選の特徴や『天盛禁令』編纂者リストに現れる官稱號や姓名に注目しながら、十二世紀後半における西夏の官僚集團とその人材登用法について検討した。この時代の西夏には、官僚養成機關での教育を経た文官系官僚と、恩蔭や部族長・官僚の推舉によつて主に宮中での庶務や宿衛として勤務したのち官僚に昇進する武官系官僚という、採用ルートの異なる二系統の官僚集團が存在し、彼らの中には皇帝の側近集團としての任務につく者もいたことを明らかにした。

そして文官系官僚の多くは漢人が、武官系官僚の多くはタングート人が採用されていることも官僚たちの姓名を分析することで明らかになった。皇帝と同族ではないタングート諸部族の者が、皇帝の側近にあつて宮中での庶務をこなしたり、宿衛の任務についたりしたのち官僚となるという西夏の武官系官僚の人材登用法は、皇帝の周邊に將來構成部族の指導者となる若年層の近衛軍を組織して中央權力を構成する、モンゴル帝國のケシク制に似た側面を有している。文官系の採用ルートを設定して被征服民である漢人を多く登用している點やケシク制のような人材登用法を中央ユーラシア型國家の特

徴の一つとみなすのであれば、遊牧民によって建國された西夏もまた、その特徴の一つを建國から百年以上経過した十二世紀後半においてもなお具備していたことになる。おそらく建國當初は武官系官僚の採用法のみであったが、國家體制の整備が進む過程で文官系官僚のような人材登用法が導入されていったものとみられる。ただ、それがいつごろどのような経緯で新たに導入されたのかは今のところ不明であり、今後検討すべき課題である。

二系統の官僚集團の存在を通じて、タングート人が漢人居住地を征服するかたちで建國された西夏がタングート諸部族を結集するのみならず、被征服民たる漢人をも登用して國家體制を維持しようとする政權側の意圖を読み取ることができる。中・小規模の國家が林立し、短期間のうちに興亡を繰り返したこの時期の中央ユーラシア・東アジア諸國の中にあつて、西夏が二百年という比較的長期にわたり政權を維持できた要因には、こうした特定の民族・部族に偏らない人材登用策があつたことも考慮に入れるべきであろう。

略 號

『史諱』＝陳垣（新會）一九三三『史諱舉例』臺北、文史哲出版社、一九八七年復刻。

『俄藏』＝『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黑水城文獻』一～十二卷、上海、上海古籍出版社、一九九六～二〇〇七年。

参考文献（著者名ABC順）

白 濱 一九八七 「論西夏使臣の「蕃號」問題」 中國社會科學院民族研究所主編『中國民族史研究』北京、中國社會科學出版社、四五四～四七三頁。

陳 炳 應 一九八七 「西夏軍隊の征選、廩給制度」『西北史地』一九八七年第一期、三二～三七頁。

岩 崎 力 一九九〇 「西夏建國とタングート諸部族」〔中央大學〕『アジア史研究』十、四一～四三頁。

Крыанов, Е. И. 1965, "Тангутские источники о государственном административном аппарате Си Ся." *Краткие сообщения института народов Азии* 69, pp. 180-196.

Крыанов, Е. И., Нисипа, Т., Аракава, С. 1999, *Каталог тангутских буддийских памятников института востоковедения российской академии наук*, Киото.

- 李 範文 一九九一
「西夏官階封號表考釋」『社會科學戰線』一九九一年第三期、一七一～一七九頁。
- 劉 興全 一九八七
「簡論西夏漢人謀士張浦」『寧夏社會科學』一九八七年第二期、八八～九一頁。
- 一九九一
「談西夏蕃官」『寧夏大學學報（社會科學版）』一九九一年第一期、八七～九一、一〇四頁。
- 劉興全・吳炎 一九八八
「試論西夏政權中的漢人官僚集團」『民族研究』一九八八年第四期、八七～九二、九七頁。
- 一九八九
「論西夏政權的蕃官問題」『中央民族學院學報』一九八九年第四期、四〇～四三頁。
- 閔 丙勳 一九八六
「金史交聘表について——西夏との關係を中心に——」『新韓學報』二三、九一～一三三頁。
- 一九九六
「西夏・金の交聘關係에 대하여」『中央아시아研究』一、九～三五頁。
- 中嶋 敏 一九三六
「西夏に於ける政局の推移と文化」『東方學報（東京）』六、七二三～七四二頁（再録『東洋史學論集——宋代史研究とその周邊——』汲古書院、三九九～四二三頁、一九八八年）。
- 西尾尙也 二〇〇〇
「金の外交使節とその人選——内政問題の觀點から——」『史泉』九一、三六～五二頁。
- 岡崎精郎 一九七二
「李繼遷の興起前夜」『タングート古代史研究』東洋史研究會、一七三～二一九頁。
- 佐藤貴保 二〇〇三
「西夏法典貿易關連條文譯註」『シルクロードと世界史』（大阪大學二世紀COEプログラム「インターフェイスの人文學」二〇〇二・二〇〇三年度報告書第三卷）大阪大學大學院文學研究科、一九七～二五五頁。
- 二〇〇六
「西夏の用語集に現れる華南産の果物——十二世紀後半における西夏貿易史の解明の手がかりとして——」『内陸アジア言語の研究』二一、九三～一二七頁。
- 二〇〇七
「西夏時代末期における黒水城の狀況——二つの西夏語文書から——」『オアシス地域史論叢——黑河流域二〇〇〇年の點描——』松香堂、五七～七九頁。
- 佐藤貴保・赤木崇敏・坂尻彰宏・吳正科 二〇〇七
「漢藏台暨西夏『黒水橋碑』再考」『内陸アジア言語の研究』二二、一～三八頁。
- 史 金波 一九九一
「西夏文《官階封號表》考釋」『中國民族古文字研究（三）』天津、天津古籍出版社、二四五～二六六頁。
- 一九九四
「西夏的職官制度」『歷史研究』一九九四年第一期、六一～七一頁。
- 史金波・白濱・黃振華・聶鴻音 一九九二
「西夏文《天盛新律》進律表考釋——西夏法典研究之一」寧夏文物管理委員會辦公室・寧夏文化廳文物處編『西夏文史論叢（二）』銀川、寧夏人民出版社、九六～一一一頁。
- 石 曉軍 二〇〇七
「隋唐時代における對外使節の假官と借位」『東洋史研究』第六五卷第一號、三七～七七頁。
- 杉山正明 二〇〇三
「帝國史の脈絡——歷史のなかのモデル化にむけて——」山本有造編『帝國の研究——原理・類型・關係

- 『名古屋大學出版會、三一～八五頁。
 二〇〇四 「西夏人儒者高智耀の實像」『モンゴル帝國と大元ウルス』京都大學學術出版會、四九〇～五〇七頁。
 梅原 郁 一九八五 『宋代官僚制度研究』同朋舎出版。
 王 國維 一九二一 『胡服考』『觀堂集林』卷二十二（中華書局復刻版、一〇六九～一一三頁、一九八八年）。
 王 民信 一九八六 「西夏官名雜考」『邊政研究所年報』十七、八一～九八頁。

註

- (1) 西夏で西夏文字だけでなく漢字が公用されていたことは既によく知られているが、河西地方においては九世紀の吐蕃支配期以來のチベット文字使用の傳統が十二世紀末に至ってもなお生きていたらしい。それは甘肅省張掖市に残る漢文・チベット文合璧の敕命碑——通稱「西夏黑水橋碑」から窺える。この碑文の詳細については「佐藤・赤木・坂尻・吳二〇〇七」参照。
- (2) 建國期のタングート諸部族の動向については「岡崎一九七二」「岩崎一九九〇」が、漢人が重臣として活躍していたことについては「劉一九八七」や「劉・吳一九八八」の研究がある。
- (3) 西夏の官司・官職名を、『宋史』をはじめとする隣國の漢文文獻から収集したものとしては「王民信一九八六」「白一九八七」「劉・吳一九八九」「劉一九九二」のほか、多數の西夏史の概説書が紹介している。西夏側の文獻からも「Кычанов1965」が官司・官職名を収集している。當初は西夏語からの音寫とみられる意味不明の官稱號が宋側の文獻に記録されていることから、西夏にタングート人に
- よって構成される「蕃官」と漢人によって構成される「漢官」という民族別の二つの官僚集團が存在するとの説が有力であったが、「史一九九四」による西夏側の文獻からの検討の結果、この説は否定された。また、各官司・官職の職掌については研究がほとんど進んでいない。
- (4) 十二世紀後半における西夏の政情については、「中嶋一九三六」「一九八八再録、四一三～四一六頁」参照。
- (5) 『金史』卷三八・禮志一一「新定夏使儀注」凡賜衣、使・副各三對、人從衣各二對、使・副幣帛百四十段、舊又賜貂裘二、無則使者代以銀三錠、副代以帛六十疋、後創之。（中略）朝辭、賜人從銀二百三十五兩、絹二百三十五疋。
- なお、同じく「新定夏使儀注」によると、入朝する使節團は正使・副使のほか參議一名、都管三名、そして「三節人從」と總稱される上節五名、中節五名、下節二十四名によって構成されていた。
- (6) 『金史』卷三八・禮志一一「新定夏使儀注」夏使至、或許貿易於市二日。

- (7) このような交易形態を関内動氏は「都亭貿易」と名づけている。詳細は「関一九九六、一八―二八頁」参照。
- (8) 金朝皇帝章宗の父の諱「允恭」の「恭」字と音通である「功」の字を避け、「節」の字に改めたものとみられる(『史諱』一六一頁参照)。龍谷大學博士課程の大島勝俊氏の教示による。
- (9) 『宋史』卷四八五・夏國傳上
其官分文武班、曰中書、曰樞密、曰三司、曰御史臺、曰開封府、曰翊衛司、曰官計司、曰受納司、曰農田司、曰群牧司、曰飛龍院、曰磨勘司、曰文思院、曰蕃學、曰漢學。自中書令・宰相・樞使・大夫・侍中・太尉已下、皆分命蕃漢人爲之。
- (10) 原典は『俄藏』十、三三―三三頁参照。『掌中珠』が國內にいる漢人とタングート人の意思疎通のために編纂されたものであることについては「佐藤二〇〇六、九五―一〇二頁」で解説している。このほか、十二世紀後半の西夏で編纂されたと考えられるカラホト出土漢語用語集——通稱『漢文雜字』(成立年代の確定については「佐藤二〇〇六、一一二―一四頁」参照)「官位部第十七」にも、「中書」「樞密」「經略」「中興」「御史」「殿前」「宣徽」「鳳匣」「承旨」「太尉」「大夫」「通判」「學士」の名が記載されている(原典は『俄藏』六、一四五―一四六頁参照)。ただし、「樞密」や「三司」と稱する官司名がこれらの文獻に存在するからといって、宋の「樞密院」や「三司」と全く同じ職掌であるとは限らない。元々の官司名は西夏語で
- 表現され、漢語に表現する際には隣國の宋など中國王朝の官司名で職掌の近似しているものを充てたと考えるべきであらう。
- (11) 『宋史』卷四八六・夏國傳下
(紹興)三十一年、立翰林學士院、以焦景顏・王僉等爲學士、俾修實錄。
- (12) 宋朝の館職については、「梅原一九八五、三二九―四二二頁」参照。
- (13) 『宋史』卷四八五・夏國傳上
文資則幘頭・韡笏・紫衣・緋衣、武職則冠金帖起雲縷冠・銀帖間金縷冠・黑漆冠、衣紫旋欄・金塗銀束帶、垂蹀躞、佩解結錐・短刀・弓矢鞬。
- (14) 蹀躞は、もともと遊牧民が錐や火打石などの道具を吊り下げるために腰に卷いたベルトのこと。王國維は『宋史』の蹀躞の記述から、西夏に遊牧民の服裝の影響があったとする(『王國維一九二二、一一〇九―一二三頁』参照)。
- (15) 『攻媿集』卷一百十一・北行日錄上・乾道五年十二月二十九日
是日、高麗・西夏使人同見。高麗使三綱、衣冠如本朝、一爲賀正、一謝遣使、一謝賜羊酒。上節、幘頭・犀偏帶、中節、折上巾・犀束帶、下節、獻頂巾・犀束帶、皆紫衫。西夏使二綱、一賀正、一謝遣使。皆以王子爲正使、戴金冠、製作甚工。朱袍・蹀躞、狀貌甚偉。副使衣冠如高麗人。三節皆不入見、椎髻被髮、小巾尖帽、皆夷服也。
- (16) 『石二〇〇七』参照。

(17) 「西尾二〇〇〇、四九頁」参照。

(18) 詳細は「李一九九一、史一九九一、史・白・黄・聶一九九二」参照。實職を表示しない位階のような稱號にはさらに二種類あり、上記リスト中の「授」の直後に續く「二字」の稱號と「文孝恭敬東南姓官」の稱號は別系統の稱號である。しかし、兩者の具體的な機能の違いは未解明である。

(19) 「中書令」は漢語からの音寫である。編纂者リスト三番目以降に現れる「中書」は、直譯すると「清い忠告」という意味の全く別の西夏文字で書かれる。官司名の「中書」も同様に表記される。『天盛禁令』では「中書令」の定員は定められていない。実際には名譽職であつたらしい。『史・白・黄・聶一九九二、一〇〇頁』で、「中書令」を中書の長官とするのは誤り。

(20) 「議判」の範圍について、直接明言する史料は存在しないが、次の『天盛禁令』卷十一「内宮の待命者等の事項門」・第八三八條「朝廷の中に来ない、朝服を着ない」から推測できる。

一、大小の臣僚が入朝しない、及び入朝しに来たが朝服を着なかつたら、罪罰を得ることについて、以下に定めているものにより判決する。

一項、(皇帝の)親族、議判が一度入朝しに来なかつたら(罰として)五貫、朝服を着て来なかつたら三貫(の錢)。(中略)

一項、駙馬、次等司の長官、中書・樞密の承旨が一度入朝しに来なかつたら三貫、朝服を着て来なかつたら

二貫(の錢)。(後略) (『俄藏』八、二二六二頁)

中書・樞密は上等司と呼ばれる最上級の官司である。二項目の對象範圍が駙馬、次等司の長官、上等司の中書・樞密の承旨であるから、一項目の「議判」の範圍はそれより上位、すなわち中書・樞密の長官以上の者ということになる。『天盛禁令』によると、内宿司と殿前司の品級は第二位の次等司。内宿司には長官が置かれなかつたので、實質的には次官の「内宿承旨」が長官となる。編纂者リスト中で内宿司の次官の稱號が、殿前司の長官の稱號より前に書かれているのはそのためである。

(22) 「御前」は、西夏語では二種類の「前」という意味の文字で表現される。これが皇帝の目の前という意味で使われることについては「佐藤二〇〇三、二二四―二二五頁」で考察している。

(23) この手紙の全録文と邦譯ならびに注釋は「佐藤二〇〇七、五八―五九・六八―七四頁」参照。

(24) 高智耀の傳記史料が複数存在することは「杉山二〇〇四」ですでに言及されている。そのうち、『廟學典禮』の記事は西夏時代の經歷を最も詳しく述べている。

(25) 『廟學典禮』卷一「秀才免差發」割注

高學士、諱智耀、字顯道、河西中興路人也。世爲西夏顯族。曾祖某、擢蕃科第一、祖某、仕至大都督府尹、父某、仕至中書右丞相。夏設蕃・漢二科以取士。蕃科經賦與漢等、特文字異耳。公、巍然擢第授僉判。(後略)

(26) 元・王惲撰『秋澗先生大全文集』卷五一「大元故大名路

宣差李公神道碑銘并序

(前略) 公諱益立山、其先係沙陁貴種。唐亡、子孫散落陝隴間。遠祖曰仲者、與其伯避地遁五臺山谷、復以世故徙酒泉郡之沙州、遂爲(湖)「河」西人。顯祖府君歷夏國中省官兼判樞密院事。皇考府君用級爵受肅州鈐部、其後因以官稱爲號。喪亂譜亡、遂逸名諱。公昆弟四人、獨公少負氣節、通儒釋、洞曉音律、以廕倖直宮省、積勞調沙州鈐部。(後略)

- (27) 閣門司の奏知(實質上の長官)・奏副(次官)の職掌については、『天盛禁令』卷十二「内宮の待命者等の事項門」に以下のような條文がある。

一、閣門奏知・奏副等は、皇帝が奏殿上に座つたならば、すなわち儀禮を行う者であつて、(殿)中に入る以外、皇帝が奏殿上に座らない間に奏する言葉で中繼すべきものがある場合は、内宿承旨に回さん。(第八六三條「奏知及び閣門檢視・役人等が(宮)中へ来る」『俄藏』八、五九九一六〇〇頁)

- (28) 一、奏上する時に、諸々の官司が奏上すべきことを持つ役人たちは、智招中門(宮殿の門名)に居らせん。(閣門)奏知たちが應答し、一つ一つを奏上せん。(第八六六條「諸司の奏上について」『俄藏』八、六七頁)
- 「天盛禁令」卷十八「他國との賣買門」・第一三二〇條「朝廷の賣買の根本となる財から私財に取り換える」。この條文の譯文は「佐藤二〇〇三、二〇六頁」参照。

- (29) ロシア科學アカデミー東方學研究所サントクトル・ペテルブ

ルク支部における筆者の實見調査に基づく。なお、調査の結果「Кирилов, Е. И., Ничипур, Т., Апкараа, С. 1999, pp. 420-421」にある本經典の奥書の録文には若干の誤りがあることが判明した。

- (30) 『宋史』卷四八六・夏國傳下
興・靈之兵、精練者又二萬五千、別副以兵七萬爲資贍、號御圍内六班、分三番以宿衛。

- (31) 『宋史』卷四八五・夏國傳上
選豪族善弓馬五千人迭直、號六班直、月給米二石。

- (32) ただし、西夏軍のすべてが部族長の率いる軍團によって組織されていたわけではなかったらしい。『天盛禁令』の軍事に關する條文の中には「諸々の父子の軍」なる名稱が現れる。唐代に安祿山が養子たちを集めて組織した「父子軍」を想起させるが、『天盛禁令』では名稱が現れるのみのため、皇帝直屬の擬制的な血縁關係を結んだ軍團であつたかどうかは不明である。なお、前章で引用した「北行日録」の記述には、西夏の正使が「王子」を稱していたとある。この記述が正しいとすれば、正使は西夏皇帝と擬制的な血縁關係を結んでいた可能性がある。

- (33) 『天盛禁令』卷六「行帥・隊の首領・房主の派遣門」・第三八二條「同族で抄を分けることについて」では、

一、諸々の首領に屬する兵の数が缺けている以外に、實数が六十抄以上の兵を持っている場合は、首領及び大人になつた子どもが協議して願つたならば、すなわち同じ姓の者のうちから三十抄以上を希望により與えん。(後

略) (『俄藏』八、一五〇頁)

とある。「抄」は軍團中の兵士の最小單位で、二名で構成されると考えられている(『陳一九八七、三三三頁』参照)。この條文では新しく軍團を編成する際には三十抄以上が必要としているから、一つの軍團が六十名以上で編成されるものであることがわかる。

(34) 『天盛禁令』卷五「季節の検査門」・第三〇〇條「假の

檢校が集まる日限に來ない」の冒頭には、「軍の正首領が朝廷のために別の職を持ち」という文章がある(『俄藏』八、一二九頁)。

(35) 皇帝を輩出したタングート平夏部嵬名氏族は、九世紀後

半までは拓跋という氏族名を名乗っていたが、黃巢の亂の鎮壓に貢献した功により、唐朝から皇帝と同じ李姓を賜った。『宋史』夏國傳には、李元昊が自らの名を「嵬名吾祖」と改稱したとある。西夏皇帝自らが發願者となった佛

典は多數殘されているが、漢文・西夏文とも彼らが李姓を稱することは無く、みな嵬名姓を稱している。十二世紀後半においては、西夏皇帝は國外に對してのみ李姓を名乗っていたようである。これには西夏が唐朝の流れをくむ政權であることを諸外國に誇示する意圖があつたのかもしれない。

(36) 『杉山二〇〇三、六八―六九頁』では、中央ユーラシア

型國家の共通要素として、遊牧軍勢力を中核とすること、部族單位の軍勢力を寄り合わせた連合體・連合政權であること、中央權力が各部族の次世代の指導者となる若年層の近衛軍と多人種からなるブレイン層によつて形成されること、などあわせて十三項目を擧げている。本稿では、それら項目のうちの一點を明らかにしたにすぎない。西夏側の文獻を利用した官制や軍制などの本格的な研究を今後進めていく必要がある。

tive military service on the frontier was chiefly imposed on those who disobeyed military regulations, and it must have been employed in circumstances in which its application was naturally limited to men. However, the early second-century BCE penal code *Ernian lüling* from Zhangjiashan shows that punitive military service on the frontier was applied for crimes that could have been committed by women. This is another case in which we can hypothesize that over time a punishment which in the past had been applied for one specific crime came to be treated as another form of labor punishment and used to punish various crimes.

With this history of the development of the penal system in mind, one should probably consider the possibility that the phenomena of some penalties not being applied to women was not only a policy of leniency, but that these punishments were originally used in circumstances that applied only for men. The interpretation of the line 婦人無刑 in the *Chunqiu Zuo shi zhuan* from the 19th year of Xiang Gong that has been rendered with the phrase “punishments for women were not established” needs to be reexamined.

TWO TYPES OF BUREAUCRACY OF XI XIA: HOW BUREAUCRATS WERE APPOINTED IN THE LATTER HALF OF THE 12th CENTURY

SATÔ Takayasu

In this study I use written sources in the Tangut language and Chinese to investigate how the bureaucrats of the Xi Xia kingdom were appointed in the latter half of the 12th century. As a result of this examination, I have made clear that there were two, differing types of bureaucrats at this time. The first type was composed of officials of the civilian bureaucracy whom had been educated in institutions designed to develop civilian bureaucrats; the second type was made up of military bureaucrats who served on the basis of attaining an inherited post or on the recommendation of a clan chieftain. And I also made clear that among these bureaucrats was a group who were appointed as close associates of the emperor.

Most of the military bureaucrats were chosen from the Tangut people of various clans other than that of the emperor. They were closely associated with the emperor and served as residential guards and did tasks in the palace and thereafter advanced as bureaucrats in various government offices. The method of

appointment for military officials was similar to the *keshik* system of the Mongol empire. On the other hand, the majority of the civilian bureaucracy was made up of Han people who had submitted to the Tangut. The existence of two methods of bureaucratic appointments not only united the various Tangut clans in the Tangut state that was constructed upon the land of the conquered Han people, one can also discern an effort of the regime to maintain the government system by having the conquered Han people participate in the government. The existence of this type of bureaucratic appointment system demonstrates one of the characteristics of the central Eurasian type of state, such as Xi Xia that enrolled various peoples into a regime that was maintained for over one hundred after its founding and lasted until the latter half of the 12th century.

THE *HU* (SOGDIAN) DURING THE TANG DYNASTY AND BUDDHIST WORLD GEOGRAPHY

MORIYASU Takao

Who was the famed *Huji* 胡姬 (Jp. *Koki*) who appears in Ishida Mikinosuke's 石田幹之助 *Chôan no Haru* 長安の春 (Changan Spring) and who was celebrated in Tang poetry as the ideal of the charming woman of the Tang. Mistaken or imperfect explanations, such as that she was Persian or of Iranian extraction or less frequently that she came from one of the nomadic peoples of the north, abound even today. However, I have defined *Huji* as "young Sogdian woman" on the basis of the meaning of the Chinese characters that make up her appellation, and considering the historical circumstances, I would like to have her understood as "a beautiful, young Sogdian woman who entranced the world with the music and dance of the western regions during the Tang dynasty." In order to do this, I first make a comprehensive introduction of historical materials, some previously known and others heretofore unknown, to verify that the word *Hu* meant Sogdian during the Tang dynasty. Central to the argument here are the *Bongo zômyô* 梵語雜名, a dictionary of Sanskrit and Chinese vocabulary that was imported to Japan from Tang during the Heian period and a map of the Asian world written in Chinese and Tibetan. To these I have added documents in Chinese and Tibetan that have been excavated from Dunhuang and Turfan and records written in ancient Turkic found on stelae in Mongolia.

Historians in post-World War II Japan who have shared the point of view of